

氏名	山本 麻奈		
学位の種類	博士（ 学術 ）		
学位記番号	博甲第	7950	号
学位授与年月	平成 28年 9月 23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	薬物事犯者の特性を踏まえた処遇に関する研究 —ニーズアセスメントツールの作成及びニーズと再犯との関連の検証—		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	濱口佳和
副査	筑波大学准教授	博士（人間科学）	青木佐奈枝
副査	筑波大学助教	博士（心理学）	大谷保和
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	佐藤有耕

## 論文の内容の要旨

山本麻奈氏の博士学位論文は、薬物事犯受刑者を対象としてニーズ・アセスメントツールを開発するとともに、女子受刑者を対象に刑務所にて実施された再犯予防プログラムの効果を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

### 目的

本研究は、我が国の薬物依存症治療領域において、犯罪の原因になっている心理的要因（ニーズ）を特定するアセスメントツールの開発と薬物依存の問題が深刻な女性受刑者を対象に、ニーズの処遇前後の変化と再犯との関連の検証を行うことを目的としたものである。

### 対象と方法

#### (1) ニーズ・アセスメントツールの作成

著者は、薬物事犯者のうち、男性受刑者 712 名を調査対象として入所直後に自己記入式 C-SRRS 原版を実施し、ニーズ・アセスメントツールの作成を試みている(研究Ⅰ)。その後、信頼性と、精神医学的診断基準や物質関連問題の諸項目を基準とする妥当性の検証が行われた(研究Ⅱ)。男性受刑者で信頼性・妥当性が確認された、「渴望感」を示す 4 因子を取り出し、68 名の女性受刑者を対象に入所直後に実施し、信頼性並びに交差妥当性の検証が行われた(研究Ⅲ)。

#### (2) ニーズの処遇前後の変化と再犯との関連の検証

著者は、特定の女性刑務所における薬物プログラム受講者を対象に、受講前と受講後にニーズ

## 審査様式 2 - 1

（「回復に対する動機付け」（研究Ⅳ-1、68人）、「渴望感」（研究Ⅳ-2、94人）、「自己効力感」（研究Ⅳ-3、94人）、「対処スキル」（研究Ⅳ-4、109名）に係る自己記入式調査を実施し、それとともに受講対象者の出所後の再犯の有無を調査し、受講によるニーズの変化や受講後のニーズの水準が実際の再犯防止に寄与するかを検証している。プログラムは段階別実施された。まず、薬物プログラム対象者全員に、視聴覚教材の視聴を中心とした速習プログラムを受講させ、更なる処遇が必要・有効と考えられる受刑者に対し、ミーティングプログラム（自助グループミーティングに近い形でグループワーク）と、リラプス・プリベンションプログラム（認知行動療法による薬物再使用を阻止する具体的な対処スキルの習得を目的としたプログラム）のいずれかのグループワークが実施された。本研究で取り上げた4つのニーズの内、回復に対する動機づけと渴望感には全てのプログラムを対象に、自己効力感及び対処スキルについてはリラプス・プリベンションプログラムについて検証された。分析は比例ハザードモデルにより実施された。

### 結果と考察

#### (1) ニーズを特定するアセスメントツール (C-SRRS) の作成

男性受刑者において、「再使用への欲求」「情動・意欲面の問題」「薬理効果への期待」「薬物使用への衝動性」「断薬への自信欠如」「薬害・犯罪性の否定」の6因子構造の尺度が作成された。6因子の内、「断薬への自信欠如」「薬害・犯罪性への否定」以外の4因子は、「耐性上昇—離脱—渴望—薬物探索行動」という図式における渴望感を示すものと考察された。一方、「断薬への自信の欠如」「薬害・犯罪性への否定」は、薬物探索行動を正当化するための認知の動きと考察され、6因子が大きく2領域に分かれる可能性が論じられた。6因子のうち、「断薬への自信欠如」及び「薬害・犯罪性への否定」については、信頼性係数が他の4因子と比べて低いほか、妥当性検証の諸尺度との関連について、他の4因子とは異なる結果となることが多かった。そのため、女性受刑者においては、「再使用への欲求」「情動・意欲面の問題」「薬理効果への期待」「薬物使用への衝動性」の4因子のみが取り上げられ、それらの妥当性が検証され、適用可能性が示された。女性受刑者の場合、暴力被害体験のトラウマからの逃避や交際している男性の影響など、渴望感が生じる背景や表出傾向に女性特有の特徴があると推察されたため、著者は、処遇は男性受刑者とは異なる在り方を検討する必要があることを論じている。

#### (2) ニーズの処遇前後の変化と再犯との関連の検証

回復に対する動機づけ(研究Ⅳ-1)については、処遇による回復に対する動機づけの向上が認められたものの、処遇後の回復に対する動機づけ・処遇による変化が再犯に与える影響について有意な結果は得られなかった。渴望感(研究Ⅳ-2)については、いずれのプログラムにおいても処遇による渴望感の有意な変化は認められなかったものの、処遇後の薬理効果への期待と薬物使用への衝動性が高い受刑者ほど再犯に及ぶ確率が高くなるという結果が得られた。また、情動・意欲面の問題において、受講前から受講後を引いた差が大きくなるごとに再犯率が高くなるという結果が得られた。自己効力感(研究Ⅳ-3)については、処遇による自己効力感の上昇は認められなかったが、処遇後の自己効力感が高い受刑者ほど再犯に及ぶ確率が低くなること、処遇前後の自己効力感の変化量は再犯率に影響しないことが明らかとなった。対処スキル(研究Ⅳ-4)については、処遇後に対処スキルの向上が認められ、処遇後の対処スキルが高い受刑者ほど再犯に及ぶ確率が低くなること、処遇前後の対処スキルの変化量は再犯率に影響しないことが明らかとなった。これらのことから、著者は、回復への動機づけや自己効力感は、単純な変化の度合いではなく、その内容が現実的な根拠に基づ

## 審査様式 2-1

くものかどうかなどが重要になることを論じている。

### 全体的考察

本研究の結果全体から、著者は、対象者個々のニーズがどのような状態にあるのかを把握した上で、段階別にプログラムを実施することで、薬物への渴望感を克服するための自己効力感や対処スキルを適切に身につけること、そしてそのために回復に対する動機付けを維持しつづけることが重要であることを主張している。特に女性においては、薬物使用の動機に情動・意欲面の問題からの逃避や回避が推察されるため、プログラムを通して背景にある被虐経験やPTSD、薬物と結びついた人間関係等に対処するスキルを身につけることの重要性が示唆された。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

薬物依存の受刑者を対象とした薬物依存の心理的要因を網羅的に測定する尺度を開発した点、特に女性受刑者対象に信頼性と妥当性を検証した点にオリジナリティが認められる。さらに、女子受刑者を対象に、刑事施設内で再犯予防プログラムを実施し、プログラム受講前後のニーズの変化、受講後のニーズの水準を指標とし、再受刑との関連を比例ハザードモデルで検討した点も、国内の研究としては類を見ないものであり、高いオリジナリティがあると評価できる。特に女子受刑者には男子受刑者とは異なる特有の背景があることを指摘し、処遇への提言を行っている点は、今後のこのテーマの研究にとって大きな導きになるものと評価できる。今後の課題として、薬物依存に係る心理的要因の刑事施設内での測定の内実や刑事施設内で行える効果的な処遇と出所後に行うべき効果的な処遇のあり方についてさらなる検討が望まれる。

平成 28 年 8 月 3 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。